

## 一. 庄内にはいつから人が住み始めたのでしょうか

庄内小学校の南の正門横に「庄内弥生遺跡」の案内板（写真）が設置されています。今から八十年ほど前の昭和の初めに庄内小学校の建設にあたって、その敷地の地上げ用土を採集するため、旧校舎の北側に池を掘ったところ、弥生式土器や古墳時代の土器が出土しました。

この池は校舎全体が北側に寄ってしまったため、今はありません。特に、弥生式土器は出土した時代が昭和の初めと早かったため、弥生式土器の典型として「庄内式土器」と呼ばれ、東京国立博物館が所蔵しています。豊中南ライオンズクラブが「庄内式土器」のレプリカを作り、庄内小学校へ寄贈しています。この庄内弥生遺跡は猪名川左岸で最も南にある遺跡です。庄内にはこの遺跡のほか、名神高速道路豊中インターチェンジの北側に標柱がたっている「島田弥生遺跡」があります。これらは弥生時代に人が住んでいたという証明になります。

多くの本によれば、当時、猪名の入江が深く入り込み、猪名川の河口には多くの島々があったといわれています。それを物語るものとして、淀川区、西淀川区等には島をつけた地名が多いことに気づかれるはずですが。その様子を「難波の八十島（やそじま）」と呼ばれていました。平安時代には神崎川で「八十島祭」が行われたと言われています。「八十島祭」は天皇の即位の折、難波の神に特別な霊威があると考えられており、天皇が着衣される衣をもって、女官等が船の上でこの衣を振ってその霊威を得るために試みたと言われています。

この庄内遺跡、島田遺跡の地は猪名の入江の中の微高地で島状の状況になっており、そこに古代人が住んでいたのではないかと私は考えています。中央幹線水路の整備事業がおこなわれ、水路敷の整備だけでなく、周囲の緑地帯も整備されましたが、その緑地の一角に弥生時代の「たてあな式住居」のレプリカ（写真）が設置されました。



「庄内弥生遺跡」の案内板



「たてあな式住居」のレプリカ